



人と自然が共創する  
第3期  
計画期間  
令和8～12年度  
豊かな農業のまち別海

# 別海町 農業・農村振興計画



令和8年3月  
北海道別海町

# 目 次

## 第1章 計画策定の基本的な考え方

- 1 新たな計画を策定した背景…………… 1
- 2 本計画の性格と特徴…………… 2
- 3 目標年次（計画期間）…………… 2

## 第2章 別海町の農業・農村をめぐる情勢

- 1 農業生産をめぐる国際・国内の情勢…………… 3
- 2 別海町の農業・農村の現状と課題…………… 4

## 第3章 別海町の農業・農村の将来像

- 1 基本的な方針…………… 8
- 2 別海町が目指す農業・農村の将来像…………… 10

## 第4章 将来像の実現に向けた取組

- 1 取組の3つの柱…………… 11
- 2 (1) 郷の「環境」を育む ～環境との調和と多面的機能の発揮～…………… 12
  - ・ 農業：環境と調和のとれた持続可能な農業の推進…………… 12
  - ・ 農村：良好な水環境の保全と、美しい農村景観・農場環境の創造…………… 15
- (2) 多様な「個性」を磨く ～多様な選択肢と豊かな暮らし～…………… 18
  - ・ 農業：多様な担い手が支える安定した農業経営の確立…………… 18
  - ・ 農村：活力に満ち、心豊かに安心して住み続けられる地域づくり…………… 20
- (3) 消費者との「信頼」を築く ～確かな評価と高い信頼～…………… 23
  - ・ 農業：消費者ニーズに応える安全・安心・良質な生産活動の推進…………… 23
  - ・ 農村：地域資源と創意工夫を活かした幅広い連携や地域交流活動の推進…………… 27

## 第5章 計画の推進

- 1 推進体制…………… 30
- 2 国、道、地域の関係機関・他産業、民間との連携協力…………… 30
- 3 進行管理…………… 30

### (参考)

- 1 別海町農業・農村振興計画の施策体系…………… 31
- 2 取組の目標値…………… 32
- 3 用語解説…………… 33

## 第1章 計画策定の基本的な考え方

### 1 新たな計画を策定した背景

別海町は、広大な大地と豊かな海、摩周湖から流れを發する西別川などの大小の河川が縦横につながる豊かな自然環境や優れた景観を有しています。こうした恵まれた資源を基に、昭和30年代の根釧パイロットファーム、昭和48年から58年の新酪農村の建設により大規模な酪農専業經營を展開し、現在まで日本有数の生乳生産地として発展してきました。

近年、世界的な人口増加により食料需要が増大する一方、気候変動による異常気象の頻発化や地政学的リスクの高まりにより、世界の食料生産・供給は不安定化しており、我が国の食料の安定供給に別海町が果たしていく役割は、ますます大きくなっています。

こうした豊かな土地基盤などを背景に、規模拡大や生産拡大を進め、順調に発展してきた別海町の農業ですが、不安定な国際情勢や農業生産資材等の高止まり、離農や高齢化による担い手の減少、労働力不足や地域コミュニティ機能の低下、自然環境との調和や野生鳥獣被害の深刻化、生乳需給の緩和など様々な課題に直面しています。

こうした中、国においては、平時からの食料安全保障を実現する観点から、我が国の食料・農業・農村を維持・発展させるため、「食料・農業・農村基本法」（平成11年法律第106号）に掲げる「食料安全保障の確保」、「環境と調和のとれた食料システムの確立」、「多面的機能の發揮」、「農業の持続的な発展」、「農村の振興」の五つの基本理念に基づき、施策の方向性を具体化する新たな「食料・農業・農村基本計画」（令和7年4月公表）を策定しました。

別海町では、「将来にわたって持続的で多様な農業生産」と「魅力ある農村環境の確立」を目指し、平成18年3月に「環境」「個性」「信頼」という3つの視点を柱とした「第1期別海町農業・農村振興計画」を策定しました。その後、平成28年7月に「第2期別海町農業・農村振興計画」を策定し、令和4年3月の中間年の見直しを経て、別海町の農業・農村の将来像の実現に向けた取組を推進してきました。

別海町の農業は、地域の基幹産業として重要な役割を担っているため、このような時代の潮流をしっかりと見極めながら、「将来にわたって持続的で多様な農業生産」と「魅力ある農村環境の確立」に向けて、引き続き力強く発展していくことが求められています。

こうした観点から、農業・農村を取り巻く環境や社会情勢の変化を踏まえ、新たな「第3期別海町農業・農村振興計画」を策定することとしました。

## 2 本計画の性格と特徴

この計画は、国の新たな「食料・農業・農村基本計画」や「北海道農業・農村振興推進計画」、「別海町総合計画」の方向性などを踏まえ、町内の生産者、消費者、関係機関・団体が連携・協力を強めながら別海町の農業・農村振興に取り組む共通の指針であるとともに、町民はもとより町外の消費者や関係機関・団体などへの別海町からのメッセージとしての性格を持っています。

また、「環境」、「個性」、「信頼」という3つの柱を立て、おおむね10年後の別海町の農業・農村の将来像を掲げるとともに、その実現に向けた取組方向を示しています。

この度の計画策定に際して、別海町の農業・農村に関する現状課題や将来展望を把握するとともに、町民の皆さまの率直な声を聞くことを目的としたアンケート調査を実施し、その結果を受けて、優先的・重点的に取り組むべき事項を明示しています。

## 3 目標年次（計画期間）

計画期間については、令和8年度（2026年）から令和12年度（2030年）までの5年間とします。

なお、社会・経済情勢の変化などにより、この計画の推進に大きな影響のある場合には、期間中においても必要性を検討した上で計画の見直しを行います。

# 環境・個性・信頼の豊かな農業・農村 人・水・緑がめぐる農業・農村



## 第2章 別海町の農業・農村をめぐる情勢

### 1 農業生産をめぐる国際・国内の情勢

#### (1) 世界の食料需給

世界の食料事情は、需要の増加、供給の不安定化、これらに伴う需給のひっ迫といった不安要素を抱えています。

##### ① 世界の食料需要

世界人口については、中・低所得国における人口増加を背景に今後も増加していくと予測されており、2033年には87億人となることが見込まれています。また、それらの国の経済発展に伴う食生活の変化による影響から、一人当たりの食料需要量が増加することが見込まれています。

このように、世界人口、一人当たり食料需要量の双方が増加することから、世界の食料の総需要量は今後も増加傾向が続いていくことが見込まれています。

##### ② 世界の食料供給

世界の食料供給量については、農地面積や単収の大幅な増加が鈍化する一方、気候変動に伴う異常気象の頻発化や家畜伝染病等の不測の発生など各年の供給量に大きな影響を与える可能性が高まっていることから、供給の伸びは鈍化していくと見込まれています。

また、農産物市場への投機資金の流入、ロシアのウクライナ侵略を始めとした地政学的リスクの影響のほか、経済のグローバル化の進展に伴う各国の貿易交渉の複雑化等により、食料供給が不安定化するリスクが高まっています。

#### (2) 国内の食料需給

国内の食料事情は、人口減少に伴い需要の減少が見込まれる一方、農業者の減少・高齢化、農地の減少等から、農業生産の増大や食料の安定的な輸入の確保が求められています。

##### ① 国内の食料需要

日本の人口動態は2008年の1億2808万人をピークとして減少局面に転じており、2024年10月1日時点での推計人口は約1億2400万人となっています。この10年間だけでも約340万人の減少が生じており、今後もこの傾向は継続するものと見込まれています。

こうした消費者数の絶対的な減少に加え、単身世帯や少人数世帯の増加や高齢化の進行に伴い、消費者の食事量や食品選択の傾向も変化しており、従来の大容量商品や高カロリー食品の需要が減少するなど、食料全体の需要量が縮小し、国内市場に深刻な影響を与えると予想されています。さらに、地方部の過疎化により地域密着型の食品店や飲食店の経営が困難になるケースも増加しています。

これらの複合的な要因により、外食産業から食品小売業、食品製造業に至るまで、食関連産業全体での市場規模の縮小と構造変化が不可避となっており、業界全体での戦略的な対応が急務となっています。

## ② 国内の食料供給

国内の農業者の減少・高齢化は著しく進展しています。基幹的農業従事者（15歳以上の世帯員のうち、ふだん仕事として主に自営農業に従事している者）は、2000年の240万人から2024年には111万人と半減し、その年齢構成のピークは70歳以上の層となっています。

一方、農地は、1961年の609万haから2020年には440万haまで減少し、日本の人口1.2億人分の国内需要を賄うために必要な面積の1/3程度しかない状況です。

そのため、日本の食料供給は、国内の農業生産の増大を基本とし、国内生産だけでは賄えない食料の安定的な輸入の確保、凶作や輸入の途絶等の不測の事態に備えた備蓄を図ることにより行われています。

## 2 別海町の農業・農村の現状と課題

### (1) 農業構造の変化と今後の見通し

別海町の農業は酪農・畜産を中心とし、広大な草地資源と摩周湖の伏流水を水源とする豊富な水資源を活かして、家族経営を基本としながら近代的な農業生産が行われています。

別海町が全道に占める割合は、牧草地面積、乳用牛飼養頭数、生乳生産量がそれぞれ約12%であり、全国に占める割合は、牧草地面積が約10%、乳用牛飼養頭数が約8%、生乳生産量が約7%と、大きな割合を占めています。

別海町の酪農家の1戸当たりの経営規模は、耕地面積の平均が96ha、1戸当たりの生乳生産量の平均は784トンと、1戸当たりの生産規模も年々増えています。

一方、生乳生産量は、令和4年から令和5年にかけて、新型コロナウイルス感染症の流行などを要因とした生乳の需給緩和により、道内の生産者団体が自主的に生乳の生産抑制に取り組んだ結果、令和4年以降、減少傾向で推移しました。その後、生産抑制が見直され、令和6年には再び増加に転じたものの、依然、牛乳や脱脂粉乳等の需要が低迷しており、以前の水準には回復していない状況です。

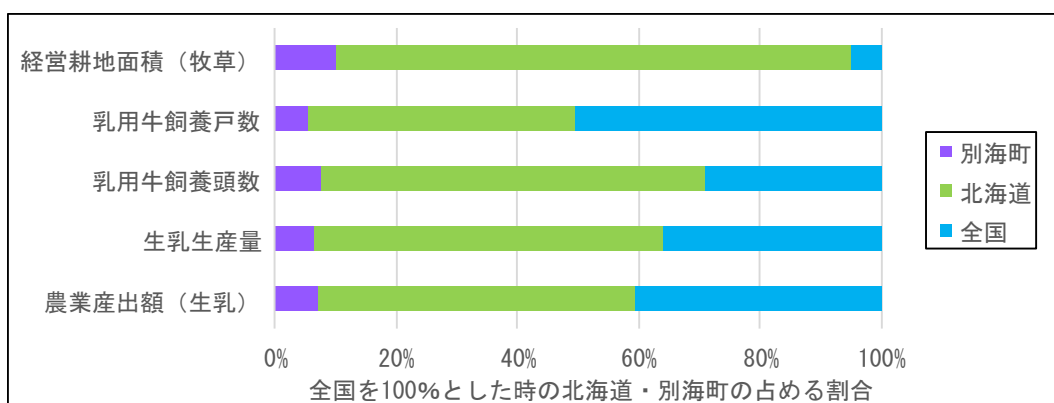
また、生乳の新規出荷戸数が出荷停止戸数を大きく下回る状況が長らく続いており、高齢化や後継者問題などにより、農家戸数は減少が続いています。別海町での新規就農者は、別海町酪農研修牧場の卒業生が初めて就農した平成10年以降、年平均3戸程度で推移しており、平成10年から令和6年までに91組が新規就農しています。町内の乳牛飼養戸数が平成10年度の1,030戸から令和6年には586戸に減少しましたが、減少数の約2割を新規就農が補った形となっています。

今後は、農業・農村の持続的な発展に向け、地域が一体となって将来にわたり多様な担い手を円滑に受け入れる取組の強化が求められています。

### 別海町が北海道・全国に占める割合

	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年	令和6年全道
乳用牛飼養戸数	671	651	638	617	607	586	4,970
乳用牛飼養頭数 (1戸当たり)	107,132 160	109,110 168	110,679 173	112,349 182	107,382 177	99,121 169	816,800 164
生乳生産量 (1戸当たり)	491,281 732	501,239 770	514,054 806	502,638 815	477,375 786	489,841 836	4,233,050 852

(資料：農林水産省牛乳乳製品統計調査、北海道農林水産統計、別海町調べ)

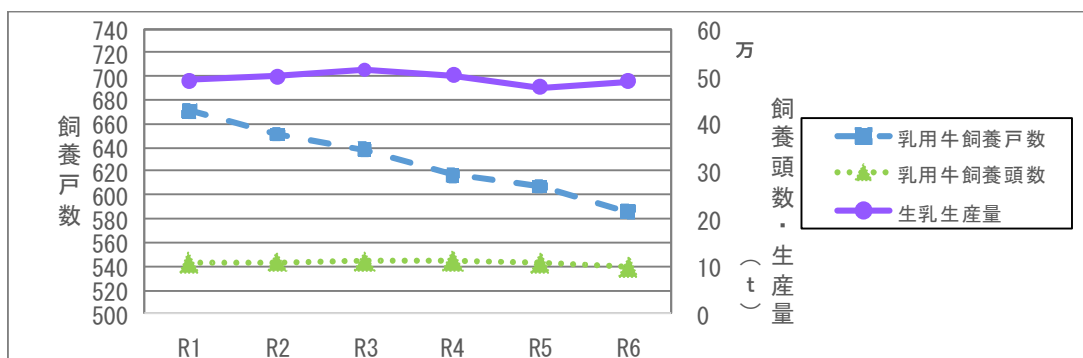


### 農家戸数・飼養頭数・生産量の推移

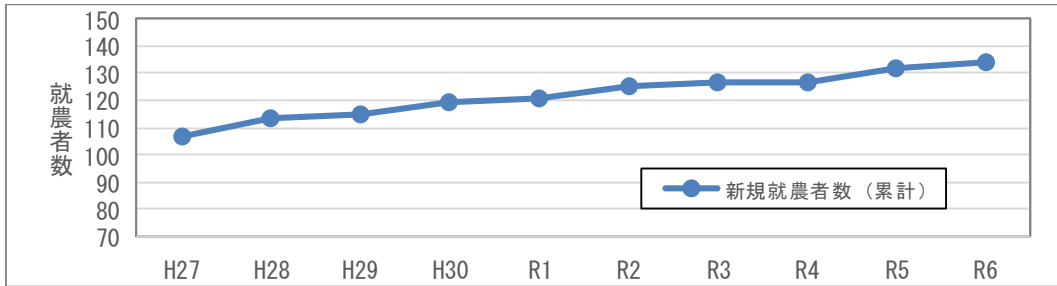
(単位：戸・頭・トン)

区分	単位	別海町 (A)	北海道 (B)	A/B	全国 (C)	A/C
経営耕地面積 (牧草)	ha	60,128	496,400	12.1%	585,900	10.3%
乳用牛飼養戸数	戸	586	4,970	11.8%	11,300	5.2%
乳用牛飼養頭数	頭	99,121	816,800	12.1%	1,293,000	7.7%
生乳生産量	トン	489,841	4,233,050	11.6%	7,357,451	6.7%
農業産出額 (生乳)	億円	593	4,341	13.7%	8,318	7.1%

(資料：農林水産省牛乳乳製品統計調査、北海道農林水産統計、別海町調べ)



新規就農者数の推移



(資料：別海町調べ)

## (2) 別海町の農業経営の動向

別海町は、家族経営を基本とした大規模で専門的な酪農経営が大半を占めているため、酪農を取り巻く国内外の様々な情勢変化に影響を受けやすい経営体質です。

近年の段階的な値上げにより乳価は高値で推移していますが、生産資材価格の高騰に加え、新型コロナウイルスの感染拡大以降、生乳需給の緩和が長期化しているほか、国際化の進展など酪農経営は先行きが不透明な状況であるため、今後とも、生乳や乳製品の品質向上、高付加価値化や消費拡大の取組の推進、更なるコストの低減等が求められています。

農作業の外部委託については、効率的な労働力の活用や労働負担の軽減、機械経費の削減などを支援する、コントラクターの利用が定着してきた一方で、酪農ヘルパーの加入戸数は、農業者の減少や酪農ヘルパー人員の不足等の影響から年々減少傾向にあります。

また、哺育、育成管理の外部委託システムや粗飼料の収穫・調整を行うTMRセンターなど、多様な現場のニーズに応じて営農支援組織が整備されています。

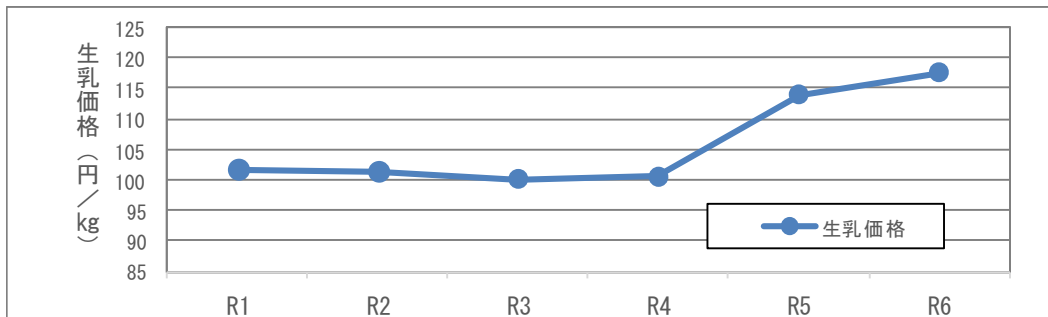
別海町においては、それぞれの経営体が有する資源を創意と工夫を凝らしながら最大限に活用することを基本に、時代の変化やそれぞれの経営方針に合わせてスマート農業など新たな営農技術の導入や経営の複合化・多角化を進めていきます。

生乳価格（プール乳価）の推移

(単位：円/kg)

	令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年
生乳価格	101.57	101.24	100.08	100.53	113.88	117.57

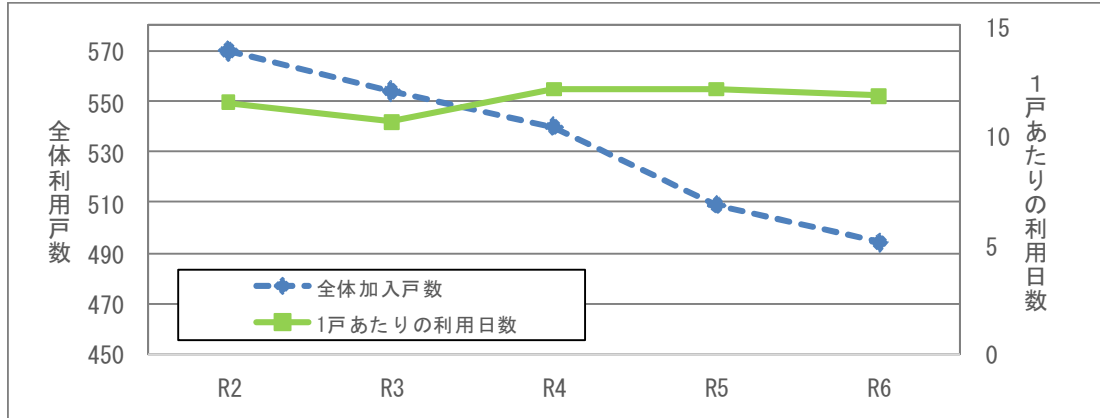
(資料：ホクレン資料、別海町調べ)



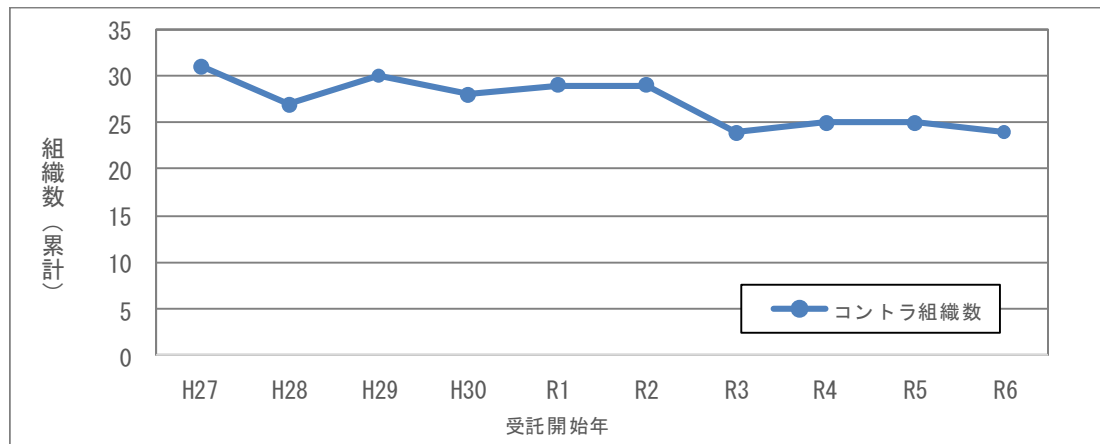
### 酪農ヘルパー利用の推移

	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年
全体加入戸数	570	554	540	509	494
1戸あたりの利用日数	11.5	10.6	12.1	12.1	11.8

(資料：別海町調べ)



### コントラクター受託開始年次表（累計）



(資料：別海町調べ)